

***** セルラス物語 エピソード4 *****

「いずれ学校で孤立するのではないか？」と不安だった娘の変化

当時5歳だった娘は、言葉がキツく、いつも怒っているような印象を与えていました。

幼稚園でも「お友達にキツイ言葉を吐いている」と先生から聞いて私はとても不安でした。

娘の方は、幼稚園でイヤだった出来事ばかり話しているのも、更に不安になりました。

娘がキツくなったのは、母親である私の影響ではないかと思い、何が悪くて、娘がキツくなってしまったのだろうか？私がどう変われば娘は穏やかになるのだろうか？答えを日々考えていました。

そんなキツイ印象を与えてしまう娘でしたが、母親から見ると、他の子よりも繊細なように感じておりました。

このまま行けば、いずれは学校で孤立してしまうのではないか？娘が孤立してしまったとき、私一人では支えてあげることができるのだろうか？

娘には、逃げ場が必要なのだと考えるようになっていました。そのような思いもあり、セルラスに入会しました。

入会したばかりの頃、娘は、ピアザの仲間たちにキツイ言葉を吐いたり、文句を言ったりしていました。

しかし、ピアザの仲間たちと一緒に活動するようになってしばらく経つと「私がやりたい」と積極的に参加するようになりました。

ピアザでは、今日あったことをみんなの前で発表する機会があり、他の仲間たちが興味を持って質問してくれたり、褒めてくれたりするの嬉しかったようです。

日本語での発表ですが、娘は自分の思いを伝える能力が少しずつ伸びてきたように感じました。

多言語で話す場面でも、娘は、話せないことはジェスチャーで伝えたらいいと理解し、全身を使って伝えていました。

ピアザの仲間たちには「ジェスチャーが得意な、みほちゃん」と受け入れてもらえるようになっていました。

自分の思いが伝わっていることや、得意が伸ばせたことは娘にとって大きな喜びになっているようです。

私は、娘のキツイ言葉を改めなくてはいけないと思っていましたが、娘に必要なだったのは、仲間たちに受け入れてもらえる安心感だったのかもしれない。

ピアザで活動して1年10ヶ月になりますが、伝えたい思いを聞いてもらえる場があることで、娘は変化してきました。最近では、学校であったことも楽しいことを報告するようになりました。私は、以前、理事長がピアザでお話ししてくれたことが、最近になってようやく分かりました。

それは、
「子どもは、『今日、何が楽しかった?』と聞かれても答えられないものだ」
長い1日の中から「楽しい」出来事を思い出し、それを人に伝わるように話すには訓練が必要なのだそうです。
娘は、今、ピアザで、その訓練をしているのだと思います。

ピアザが娘にとって逃げ場になってくれると思うと同時に、私がずっと心配してきた『学校で孤立するのでは……』という不安も薄らいでいます。

私一人では分からなかった、導いてあげられなかったことを、ピアザの仲間たちがフォローしてくれて、みんなに助けられていると感じています。